夏の世界

水野仙子

東京某慈善病院にて姉上様。

四月には上京しますなんてお約束して置いて、もう六月になつちまひました。春に遇つて折角生えかけた翼が、ちよつと試みた飛翔に脆くもまた傷いてから二た月になります。もう一度私を誘ひに引返して來るだらうとばかり思つてゐたのに、春はどん〳〵行つて了ひました。もうすつかり夏ぢやありませんか。ほんとに泣きたくなつてしまふ。そりあ初夏の青葉のすが〳〵しさは又なくいゝけれど、だん〳〵暑くなるといふ眞夏の思ひの前に病人は先づ怯えてしまひますもの。殊に私は常でさへも夏には意氣地がないんですから。

だけど、どんな事をしたつて來るものは來る。私の病氣だつて癒る時が來なきやあ癒らないんですわね。まあこんな悟つたやうな事を言つてるより外仕樣がありませんわ、もう丸つと一年餘り寢て來たんですから、もう少しの辛棒でせう。まだ今でも時々少しは熱が出ますの、そんな時は冷たい手拭ひを額にあてる、ぢいつと仰向けになつて、其微妙な肉體の働きが止むのを待ちます。此頃は夕方から夜にかけてが一番私の氣分のいゝ時で、初めて吾にかへつたやうな、如何にも自分が自分の體を持つてるやうな氣がして、つく〴〵と自分の腕を眺めたり、手首に指を廻して見たりして、「まあ、此位なら大丈夫！」といつたやうに安心するのです。

かうして自分の體を自分のものにして置いて、（工合ひのわるい時にはちつともそんな氣がしないんです）さて徐ろに私の氣分は外に向いて來ます。眼を庭の方にやる

度に、何といつても直ぐ目につくのは青葉で、まだ強烈ではないけれど輝いてゐる日光との調和が、美しく強く爽かにその葉裏〳〵に漲つてゐます。葉蔭にはまた隠し切れなくなつた梅の青い實が、日増しに枝を重くして行つて、少しの風にでもゆら〳〵と搖れる。この梅の實位育つて行くのが目に立つものはありませんね。今日は昨日より明日はまた確かに今日より大きくなつてゐるのですもの、あんな風に私の病氣も快くなり目に見えたらなどゝ、つい愚痴に梅の實を羨んでも見たりしてゐます。ほゝゝ馬鹿ですね。

さて夕日は落ちて倉の白壁に映え、戸前に置かれたさま〴〵の農具を照す。いつの頃か無造作に切り落されて、まだ薪ともならずに其處らに打棄つて置かれる桐の枝から、かくても猶生きようとこの努力を見せて、弱々しい嫩葉が二つ三つさしてゐるのも物哀れに初夏の氣分をそそる。火口を洩れる風呂の煙りは、むら〳〵と舞ひあがつて、やがて其折〳〵の風に解けては何處へともなく流されて行く。眼は此上もなく大きく開いてゐながら、ぢいつと靜かに瞑目してるやうな氣持ちになつて、穩かに枕に響く心臟の音を、この初夏の夕暮れの情調に溶け合せてゐるうちに、私はいつの間にか病態の齎す不快と、日中の焦燥とを忘れてしまふのです。さうして此頃夏が絶えず私に迫る「水と空」との誘惑を超越します。

水と空、それはほんとに夏の世界、さうして廣く、涼しく、清く美しくある事を私の想像に強ひます。若し翼があつたら！　そしたら天女のやうに水清く空碧いところに飛んで行かうといふのではありません。體さへたつしやなら、さうして自由に旅行が出來たならと思はれてならないのですわ。けれども前に言つたやうな幸福に靜寂な夕暮れの氣分は、こゝにも亦、この小さな寢床のままに水と空とが與へられてある事を發見させます。それは決して止むを得ずの發見でもなければ、また負け惜しみに強ひてこじつける發見でもないのですよ。

大層勿體がるので、姉様には何だか一寸想像がおつきにならないでせうね。水とは外でもない、私の枕邊近く置かれた、小さな硝子鉢の中の金魚のお家です。量つたら一升にも足らぬ水であるかも知れないけれど、やつぱり其中には微妙な運動や音律があつて、健康な人達がただ一瞥のもとに見逃すある小さなるものゝ世界を見る事が出來るのです。言ひ替へれば、それはあるものゝ部分から果しもなく展けて行く想像の働き——も少し夢幻的にいへば、一種の幻影を私が見る事なのでせう。けれども

それは、私にとつては此上もない清涼劑ですわ。

それから空はほんとに美しいものですねえ、それは女性的に繊細な美ではなくて、何處までも雄大に、競はず、衒はず、男性的といふことより以上の、人間味を超越した偉大な美です。其美は一寸見たところなんでもないやうで、決して人を見飽かせませんもの、たゞ空の美しさを知らなければそれまでゝすけれど。

去年の春かりそめに寢ついて以來、私は方々に吾が寢姿の記憶を殘して來ましたが、その春夏秋冬を通じて、私は 私の頭の中に空を喰べつゝ過して來ました。 何となく氣が焦つて仕樣がないやうな時でも、悠々とした青空に眼をやつたが最後、だん〳〵ぼんやりとした氣持ちになつて、それから自然〳〵と心が和らぎ落着いて來るのを覺えるのでした。

かうして今も猶、わが生れた家の軒の低い座敷から、私は 毎日〳〵空を眺めて暮してゐます。 それは倉と倉の屋根の間から、僅かに私の寢床を覗く程のものですけれど、眼界が狹いからといつて、決してあの空の廣大無邊を傷けはしません。寧ろ小さく劃られてあればある故に、私は限りもなく、果てしもなくその中に見入つて居るのです。

もうそろ〳〵暮れかけて、大分手許が薄暗くなつて來ました。「今日も送りぬ、主につかへて」と歌ふには、其日の業にもいそしまぬ身の、やゝ後めたい氣がしますけれど、靜かに暮れてゆく一日を感謝しつゝ此筆をおく事にしませう。さうして私は今、貧しく病める人達の枕邊に立つて、靜かに其脈を診てゐるあなたの白い姿を薄闇の中に見てゐます。今夜も多分私はよく眠る事が出來ませう、願はくはそれが私の上ばかりではありませぬやうに！ さようなら。

【入力者注】

底本は総ルビですが、入力者の判断で一部のみ残しました。

底本と行を合せるために、半角スペースを挿入したり、句読点などのフォントサイズを小さくした箇所があります。

以下の修正を加えました（数字は底本の頁段行）。

33下17　此頃なら　→　此位なら

初出・底本：「才媛文壇」第壹巻第四號
大正六年七月一日発行
入力：小林　徹
公開：令和五（2023）年八月十二日

水野仙子書誌年譜に戻る。